

地方都市における水辺からの地域再生プロセスに関する研究

—富山県富山市富岩運河環水公園を対象として—

日本大学	正会員	○	吉田	庸
日本大学	正会員		岡田	智秀
日本大学	正会員		押田	佳子
株式会社メイテック	非会員		西上	慧

1. 背景および目的

富山県富山市にある富岩運河は、かつて地域の産業を支える舟運により賑わいを見せていたが、近代化に伴う交通政策の変化と戦後のモータリゼーションの影響を受けて運河利用が衰退した。その結果、運河の運用が廃止され、水質環境が悪化したことを受け、運河の埋め立て案が計画された。しかしその後、旧運輸省と旧建設省などの行政間の連携により一転し「富岩運河環水公園(図—1, 2)」として整備が進められた。

その結果、この空間は運河の水面を残した景観デザインが高く評価されるに至り、市内の地域再生の中心として生まれ変わっている。

そこで本稿では、地域再生のシンボルとして開園した富岩運河環水公園の施設整備に着目し、そのデザイン整備プロセスを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 対象地概要—本稿で対象とする富岩運河環水公園は富岩運河上流部の船溜りの水面を活用し、1988年に総合公園として計画された。1992年に着工した後、1997年に一部開園、その後2011年に全面開園となった。計画面積、開園面積は共に9.7haである。

(2) 調査方法—本稿では現地踏査をはじめ、整備に関わった担当者へのヒアリング調査、図面類などの資料調査および文献調査^{[1]-[5]}を実施した。調査概要を表—1に示す。

3. 結果および考察

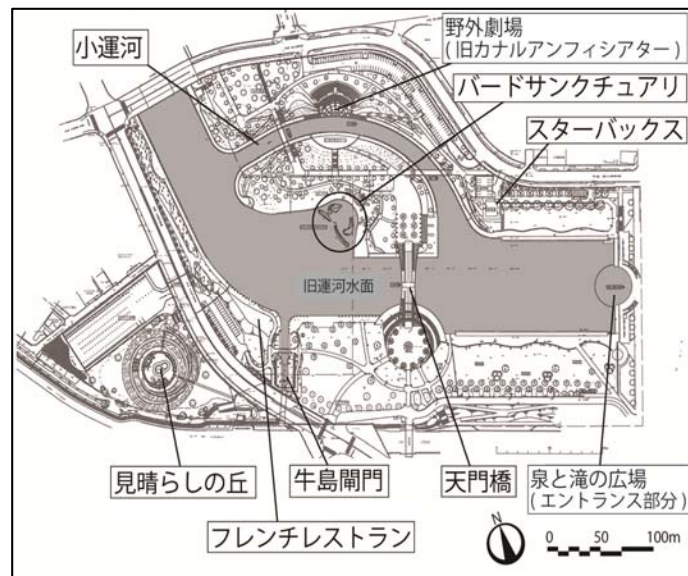
ヒアリング調査や資料調査より作成した施設整備に関するプロセスを図—3に示す。

当整備は県が主体となって1989年に公園整備事業認可後7社を指名し、カナルパーク基本デザイン設計競技が実施された。応募作品4案が寄せられた中で、水辺を活かして小運河を配し、自然性の高い空間づくりを目指した案が高く評価され基本案となった。そこで、その後の整備プロセスを「基本デザイン案修正段階(1989~2000年)」とデザイン方針に変化が生じた「施設修正段階(2001~2011年)」に分類し、その特徴を以下に述べる。

(1) 基本デザイン案修正段階(1989~2000年)—ヒアリング調査と資料調査より得られた施設計画内容と、その整備プロセスを示した図—3より、1989年の基本案から大温室植物園など13施設が抽出でき、この内10施設については2000年までに計画変更・廃止になった。大きな変更点に着目すると、神通川沿いのスポーツゾーンの廃止、図—2に示すエ



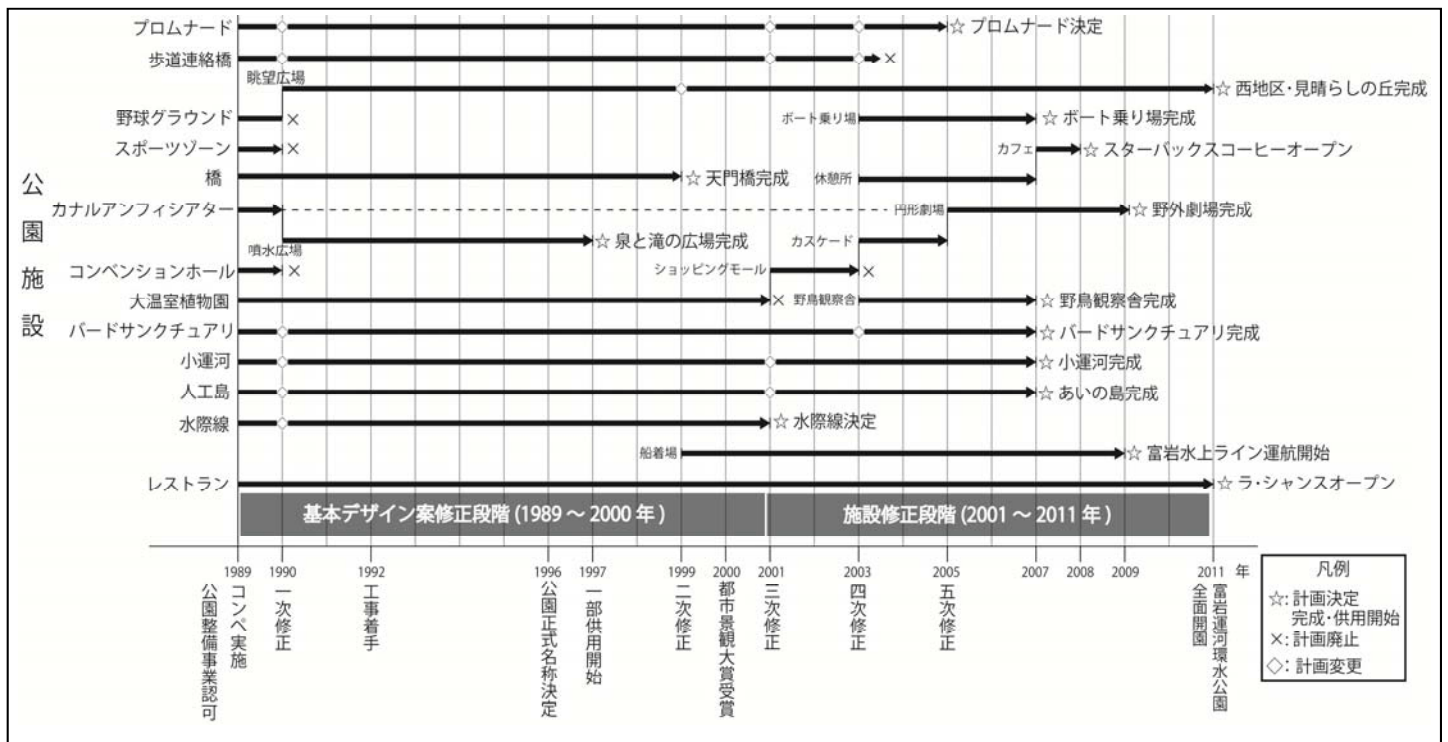
図—1 富岩運河環水公園周辺図



図—2 富岩運河環水公園の現況

表—1 調査概要

調査日	内容	
	2012年9月24日(月) (ヒアリング調査、資料調査)	2012年11月2日(金) (ヒアリング調査、現地踏査、資料調査)
ヒアリング対象者	白井芳樹氏(富岩運河環水公園整備当時の富山県都市計画課担当者)	植生雅章氏(富岩運河環水公園整備当時の富山県都市計画課公園緑地係担当者)
調査内容	埋立計画撤廃に至るプロセス/富岩運河環水公園に関わる連携/周辺住民及び議会の反応/富岩運河環水公園の整備について/富岩運河環水公園整備資金について	昭和54(1979)年に行われた駅周辺整備基本計画調査について/富岩運河再生計画の富山市の対応について/富岩運河環水公園整備について/富岩運河環水公園の集客施設の誘致について/現状の富岩運河環水公園

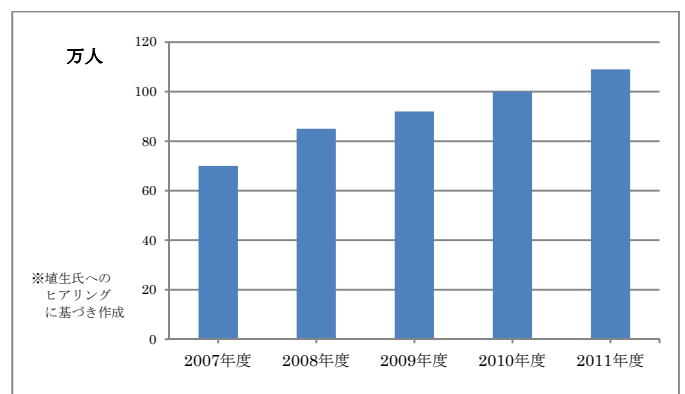


図一3 富岩運河環水公園施設整備プロセス

ントランス部のカナルアンフィシアターの位置に噴水広場が計画された。この理由として富山県の予算面の都合や富山市の区画整理の問題、基本案設計者の意向が挙げられる。しかしながら水辺を活かす基本的な方針は変えずに運河としての価値を残し、不必要な施設を取り払った結果、園内の大部分の場所から運河水面が見通せる空間構成となった。特に、当初から県は公園内に民間店舗の誘致を画策しており、水面の見晴らしが最も良く、駐車場からのアクセスが良い場所を 20 年間、計画的に残したことが、都市公園でわが国初のスターバックスコーヒー出店(2008 年)に繋がった。

以上より、富山県が中心となり基本案を大きく変えつつも、運河の水面そのものを残す形で水辺を活かす基本方針を維持し、親水性の高い空間を創出させるに至ったことが後の魅力づくりへ繋がったと考えられる。

(2) 施設修正段階(2001～2011 年) —2000 年頃、富山県が更なる財政難に直面したことで公園の施設デザインも、基本案設計者と富山県の意向との間で調整が困難となった。それに伴い施設整備は二転三転するようになり、特に人工島・小運河周辺のデザインにおいては、その影響が顕著に表れた。例えば計画初期において大温室、2001 年の三次修正においてはショッピングモールなどの施設が提案されたが、予算等の関係から実現には至らなかった。三次修正以降は公園整備の考え方も施設中心から、水辺の特性を活かしたシンプルなものを目指すようになり、エントランス部にあったカナルアンフィシアターが小運河部分に現在の野外劇場として整備された。この他に当初から船溜り部分と見晴らしの丘がある西地区を回遊させるための歩道橋の計画があったが、



図一4 富岩運河環水公園利用者推移

2001 年頃に廃止になった。その後も工事が進められ、西地区の整備完了を以て 2011 年に環水公園全面開園となった。一部開園後の利用者の推移は図一4に示すように増加の一途を辿っている。

以上より、2001 年以降の水辺をより活かしたシンプルデザイン方針への転換は、環水公園の魅力づくりに大きく貢献したといえよう。

謝辞

ヒアリング調査に御協力頂き、その後の度重なる質問にも快く御対応頂いた白井芳樹氏と植生雅章氏に深謝致します。

参考文献

- [1]富山市史編さん委員会：富山市史,1987
- [2]白井芳樹：都市・富山の礎を築く,pp45-78,2009
- [3]廣瀬誠：神通川と呉羽丘陵 - ふるさとの風土,pp.45-46,2003
- [4]石丸悟，為国孝敏，中川三郎：近代土木遺産「富岩運河」の活用に関する基礎的研究,足利工業大学研究集録,pp. 125-132,2002
- [5]大熊孝:重要文化財「富岩運河水閘施設(中島閘門)」の変遷と保全・活用の意義,pp4-8,1998